

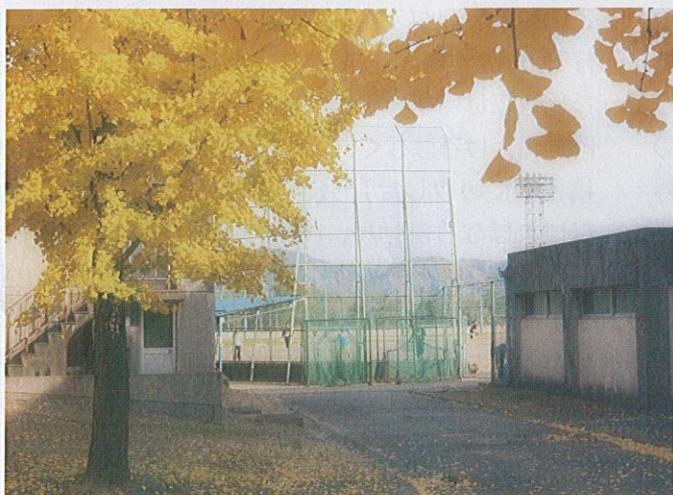
No.195

平成24年12月17日発行

目次

ページ

1. はじめに	2
2. 活躍する仲間	
第47回全国高等専門学校体育大会に参加して	3~5
第47回全国高等専門学校体育大会成績	5
アイデア対決ロボットコンテスト	6~7
全国高専プログラミングコンテストについて	7
全国高専デザインコンペティションに参加して	8
第19回全国高等専門学校将棋大会に参加して	8
第44回福井県吹奏楽コンクールに参加して	9
第36回全国高等学校総合文化祭(囲碁部門)に参加して	9
第11回平成24年度全国高等学校合気道記念大会に参加して	10
平成24年度アジアユース人材育成プログラムAYDPO2012に参加して	10
日独学生リーダー交流に参加して	11
スピーチコンテストに参加して	11
第48回高専祭	12
弁論大会	12~13
高専祭 被災体験について	13
クリーン大作戦	13
活躍する仲間たち	14~15
平成24年度教育後援会奨励研究一覧	16
平成23年度教育後援会奨励研究概要報告	16~18
3. 学生の将来と進路	
進路決定について	19
平成24年度進路内定状況	19
大学編入学試験体験記	20
就職試験体験記	20
インターンシップ体験記(本科)	21
インターンシップ体験記(専攻科)	22
専攻科生による校外発表会	22
4. 中学校の皆さんへ	
キャンパスツアー2012及び	
キャンパスリサーチ2012の開催について	23
中学校だより	23
5. 学園通信	
救急救命講習会・実技講習会	24
女子中学生の理工系分野への進路選択支援	24
平成24年度「防災訓練」の実施	25
学寮防災訓練について	25



はじめに

専攻科という選択

専攻科長 阿部 孝弘

専攻科の紹介をさせていただきます。4年生の皆さんには10月25日に説明しました。3年生の皆さんには明年1月9日に説明します。2年生の皆さんには7月4日のキャリア教育講演会の時に簡単に紹介しました。1年生と5年生の皆さんにはまだ説明していません。1年生の皆さんにはこれから専攻科のよさを説明する機会がたくさんあると思いますが、あと4カ月で卒業していく5年生の皆さんに説明する機会を持たなかったことを本当に申し訳なく思っています。

ほとんどすべての高専には、本科5年間の教育課程の後に2年間の専攻科課程が設置されています。福井高専には、機械工学科、電気電子工学科及び電子情報工学科の卒業生を対象とする「生産システム工学専攻」と、物質工学科及び環境都市工学科の卒業生を対象とする「環境システム工学専攻」の2専攻が設置されていて、今年で15年目を迎えています。

国立高専機構は、専攻科では「本科における教育の基礎の上に立って、特定の専門領域におけるより高度の知識・素養を使いこなすことによって理解の程度を進化させ、複合領域に対応できる幅広い視野を身につけ、高い課題設定・解決能力を備えた実践的・創造的技術者」を養成するとしています。福井高専専攻科ではこのことを踏まえて独自に、「得意とする専門分野を持つことに加え、他の技術分野の知識と能力を積極的に吸収し、自然環境との調和を図りながら持続可能な社会を有機的にデザインすることのできる知識と能力を身に付けた、国際社会で活躍できる実践的技術者」を目指すべき技術者像としています。ここで「得意とする専門分野」が本科で学ぶ内容を表しています。しかし、将来得意とする専門分野だけで仕事ができるとは限りません。他の技術分野の知識が必要となる時が必ず訪れます。専攻科では他の技術分野の授業が履修できるように配慮しており、本校が目指す「ものづくり・環境づ

くり」能力を育成します。そして、修了生が目指す技術者になれるように学習・教育目標を定め、学習・教育目標が達成できるようにカリキュラムが組まれています。

具体的な専攻科の魅力を説明します。1番は福井高専の指導教員のもとで2年間の研究活動期間が持てることです。2年間の研究活動期間は大学院前期博士課程に相当します。高専本科卒業生にない研究・開発能力を身につけることができ、このことは各大学の大学院が専攻科生に進学してほしいことで分かります。大学から進学してくる学生よりも専攻科から大学院へ進んできた学生の方が研究能力の高いことは、専攻科生を受け入れている大学院の教員から何度も聞いています。何故なら、我々福井高専の教員が手塩に掛けて研究指導しているからです。

次に、専攻科では「環境生産システム工学」という融合複合型の教育プログラムを実施しています。この教育プログラムは本科4年から始まって専攻科修了で完結します。現代の多様な社会で活躍できる技術者には目指す技術者像にもあるように1つの専門知識だけではなく、他の技術分野の知識と能力を積極的に吸収したT形技術者、Π形技術者を目指さなければなりません。「環境生産システム工学」プログラムではそのような技術者養成を目指しています。このプログラムは日本技術者教育認定機構(JABEE)から認定を受けていて、この認定は専攻科修了生の皆さんがグローバルに活躍したいという時に威力を発揮します。

最後に学費が安いことが保護者の皆様には何よりの魅力となろうと思います。本科と同じ授業料で勉学できます。

本科生の皆さんは高専という選択をして福井高専に入学してきました。次は専攻科という選択が皆さんを待っています。さらに知りたい人は各学科にいる専攻科委員の先生に聞いてください。私に直接聞きに来ていただいてもかまいません。歓迎します。

第47回 全国高等専門学校体育大会に参加して

全国大会を終えて

陸上部 3E1 伊吹哉太

8月、私は鳥取県で行われた全国高専大会に、陸上選手として参加した。普段は寮生ということもあり、満足のいく練習はできていなかった。なぜなら夏期休業中は寮が開いていない。さらに、休業直前まで前期末テストがあった。約1カ月もの間、まともな練習はできていなかった。正直、内心では勝つことをあきらめていた。スポーツ選手に一番必要な勝利を信じる気持ちが欠けていたのである。理由は練習不足だけではない。私は昨年も全国大会に運よく参加しており、そのときは練習していたにもかかわらず大敗した。これがトラウマになっていたのかもしれない。上がらないモチベーションにひどく困らされた。

大会当日、驚いたのは、他の選手の目である。少なくとも私とは違う目をしていて。私はその目にひどく恐怖を感じた。彼らにあって私にないもの。体力や技術ではなく精神的なものである。彼らの目には重さがあった。考えれば当たり前である。地区大会で戦った何十人もの気持ちを背負っている。このとき、私は勝つことをあきらめて練習していなかったことを後悔した。戦った人たちになんて失礼なことをしたのだろうか。もし来年も全国大会という機会が得られたならば、私は今まで一緒に走った人の気持ちも一緒に、またそれに恥じない走りをしたい。



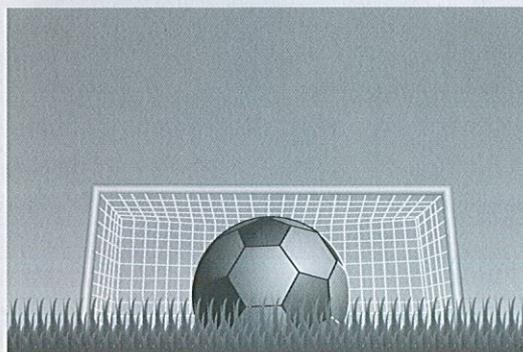
最後の北信越大会

サッカー部 5E 亀井孝弘

今年の夏、富山県で北信越高専大会がありました。1年の時から今年で5回目の大会であり、今年で最後の大会です。この大会で試合に負けたら引退、1年の時から4年連続全国大会出場、キャプテンとしてチームを牽引しないといけないといったプレッシャーがのしかかりました。しかし、5年間毎日厳しい練習をしてきたということで自信がありました。このこともあり、厳しい試合もありましたが、北信越大会で優勝することができ、5年連続で全国大会に出場することができました。

全国大会の開会式で「試合では練習したことしかできない。しかし緊張すると練習したこともできない」という言葉を言っていました。今まででこのような経験をしてきたからこそ、私はこの言葉が心に残っています。

サッカーを通して5年間の日々は人間的にも成長でき、成功も失敗もすべて自分を成長させてくれました。自分がサッカーを続けてこられたのは長水先生をはじめ、家族、応援して下さった周りの人たちの支えがあったからだと思っています。感謝しています。



活躍する仲間

第47回 全国高等専門学校体育大会に参加して

「先輩を手ぶらで帰せない」

テニス部主将 4E1 佐 飛 辰 弥

全国高専大会二連覇を成し遂げた先輩たちが抜けてから2年、地区予選敗退から1年、全国の舞台上でプレーするのは石橋先輩以外皆初めてだった。

気温35℃を超え、立っただけでも汗が噴き出す猛暑の中、僕達4年5人、1年2人に今年が最後の5年生石橋先輩。現在日本テニス界のトップ錦織選手の故郷島根県松江市のテニスコートで試合前の円陣を組んでいた。

全国の舞台上で自分達のテニスが通用するかの楽しみと不安が入り混じり、頭が真っ白になっていた時、「石橋先輩を手ぶらで帰す訳にはいかないよな」と先生が直前練習で笑いながら言っていた言葉を思い出し、不思議と落ち着いた。そして「いつも通りやれることをやろう」と平常心に戻った。先輩がいたからチームで全国に来れた。先輩がいたから高いレベルで練習できた。だから、この舞台上で勝つことが先輩への恩返し。先生・先輩・後輩部員への感謝の気持ちで戦った結果が「銅メダル」だった。金より良いと書いて「銀」なら一歩手前は先輩のくれた僕らへの宿題だ。来年に向け部員一人一人がより目標を高く持ち「心・技・体」を鍛え、来年の全国の舞台を目指そう！



はじめての全国大会

卓球部 F5 藤 田 瑞 姫

初めての全国大会。練習している選手のプレーはとて迫力があり、圧倒された。普段の部活動で練習しているような雰囲気とは全く違い、緊迫していた。同じ全国大会に出場している選手なのに、自分だけとてもういているようにも思えた。私は、まわりの空気に馴染めずに試合をすることにならないように、普段からの練習を試合のつもりで緊張感をもちながらすることがとても大事なことだと改めて実感した。いつもと違ったところでも早く慣れることが大事と言われていたことがやっと分かった気がした。

試合当日。予選リーグから厳しいところにいると言われていたこともあり、お互いに思い切り試合をし、悔いの残らないようにしよう決めていた。点差がひらいても諦めず、話し合いながらプレーに集中することができた。しかし、あと一歩のところまで負けたり、欲しいところでポイントが取れなかったりと悔しい試合が多かった。だから、今後の練習ではできなかったところを重点的に練習していき、ミスや苦手なところを減らしていきたい。



第47回 全国高等専門学校体育大会に参加して

全国大会で見つけたこと

「森長君、そろそろ。」

と丸山先生に声をかけられたのは、面つけをしてから数分後のことであった。前試合の決着が早くもついでしまったからだ。試合場に立つと、正面にいる相手選手やライトアップに用いられる照明が目に入り、一気に緊張していくのを感じた。

お互いに礼と蹲踞(そんきょ)をし、主審のはじめ、の合図で試合が始まる。と、同時に相手が間合いに入ってきた。速攻で一本を取る、スピード剣道。苦手なタイプだ。しかも異常事態が起きる。緊張で足が動かないのだ。ヤバイ。しかし、初戦で足が動かないのはいつものことだ。本当の異常事態は体が勝

剣道部 3EI 森長剛志

手に防御してしまうことである。これでは浮いた手元を狙われて小手を打たれてしまう。初めは試合に慣れるため、自分からは打たず、相手の技を避けることにした。素早い打突をギリギリの所で避けていたが、中盤、鐳迫り合いから離れようと動いた瞬間を取られてしまった。

今回の全国大会を通して、会場の緊張感や相手選手に対する恐怖心で潰れてしまう弱い自分があることを学んだ。次こそは団体でも全国に出場し、おいしいものを食べ、自分に勝ち、そして相手にも勝てるようにこれからも稽古をしていきたい。

第47回全国高等専門学校体育大会成績

◎陸上競技 (平成24年8月25日～26日)
カ・コ・ライトスポーツ・陸上競技場

【男子200m】

伊吹 哉太(3EI) (記録) 23秒35 (予選落ち)

【男子5000m】

久島 惇(3C) (記録) 16分48秒22 (15位)

◎サッカー (平成24年8月24日～28日)
山口県おのだサッカー交流公園

1回戦 福井高専 1-4 鹿児島高専(1回戦敗退)

◎テニス (平成24年8月21日～23日)
松江総合運動公園松江市民庭球場

【男子団体】

準決勝 福井高専 1-2 旭川高専 (3位)

【男子ダブルス】

決勝 [石橋 一真(5M) 寺本 嵩史] 0-2 [伊藤壮一郎]
[玉木 壱成(4B) 伊藤壮一郎]
(準優勝) (徳山高専)

◎剣道 (平成24年8月26日)
鳥取県立武道館

【男子個人の部】

1回戦 森長 剛志(3EI) 0-1 笠岡 恭介
(1回戦敗退) (広島商船)

【女子団体の部・オープン】 (予選リーグ敗退)

【女子個人の部】

1回戦 川淵 華綸(3C) 0-2 森 美優
(1回戦敗退) (神戸高専)

◎水泳 (平成24年8月26日)
広島ビッグウェーブ

【男子100m平泳ぎ】

上田真起斗(F3) (記録) 1分22秒48(予選落ち)

◎卓球 (平成24年8月18日～19日)

【女子ダブルスの部】

岡山県津山総合体育館

〈予選リーグ〉

[福井高専(田中3C・藤田F5) 1-3 高知高専]
[福井高専(") 3-0 宇部高専]
[福井高専(") 2-3 福島高専]
(予選リーグ敗退)

活躍する仲間

アイディア対決ロボットコンテスト

ロボコンを通して

4M 青柳研汰

少し肌寒く感じ始めた10月、私達の5ヶ月間の夢は破れた。今年のテーマは「ロボペット」。テーマのとおりペットらしいロボットを製作し大会に臨むというもので、今回は地元開催ということもあり、私達は福井県民に馴染みの深い越前ガニをモチーフとしたロボットを製作した。

競技の内容は3分間に9つのゴールにボールを入れるというシンプルなものだが、ロボットの製作には困難を極めた。カニらしい歩行をどう表現するか、ゴールへのシュートの精度をどう上げるか、ロボットの誘導（ロボットに触れてはならない）をどうするか。時間と人手が足りない中、数々の問題が

発生した。最終的にはシュート機構に不安が残る中試合に臨んだ。

結果はアイデア賞、特別賞受賞。全国大会には行けなかった。やはり、シュート機構の得点力の低さによるものだろう。しかし悔いはなかった。1回戦勝利、2回戦敗北、エキシビション勝利、今まで私達が作ってきたロボットを3回も披露することができ、それがうれしかった。

会場にはロボットの好きな中学生、高専生がいただろう。ライブストリーミングで見っていた人もいるかもしれない。そんな人たちが入会し、一緒にロボットを作れることを楽しみにしている。



アイデア対決ロボットコンテスト

時間と人

4M 近藤 剛志

今回のロボコンでは大会期日直前までロボットの製作を続けており、調整の時間がほとんど取れませんでした。これは時間管理、特に作業報告ができていない点と部員の意欲の差が主な問題だと思えます。

Bチームでは設計・加工・組立等のように作業を分担しています。しかし各作業同士の報告がなされておらず、空白時間が発生していました。作業命令を出す人と実行する人の間で作業報告ができていないため、作業終了後の何も作業しない空白時間が発

生します。この時間が重なることにより製作時間がかさんでいきました。また部員間で意欲にも差があり、作業に積極的な人と消極的な人がいました。

今回のロボコンを通して、少しの報告時間を取るだけで全体の時間を短縮することができるということが実感でき、報告の重要性を痛感することができました。また全員の意欲にも気を配り、全員が活力のある活動を行なえるような部を目指していきたいです。



全国高専プログラミングコンテストについて

高専プロコン競技部門の難しさ

電子情報工学科 担当教員 斉藤 徹

福井高専ではものづくりの難しさを体得するためにも様々なコンテストに参加している。今年是有明高専主管の全国高専プロコン競技部門に、電子情報4年玉木・渡辺・機械4年奥田の3名にて参加した。

今年「数えなサイ」という競技で、テーブルにばら撒かれたサイコロを数えるというテーマであった。本高専の3名は、画像処理によって数えようとサイコロ面の画像のパターンマッチングでサイコロを数えるプログラムにて大会に望んだ。しかし不規則に傾いていたり埋もれていたり、精度よく数えることは難しく、二回戦止まりとなった。

実は、上位に進んだチームの多くは画像処理では精度がでないため、人間が目視で数える方式であっ

た。このため、大会後には「野鳥の会方式が上位を独占するようではプロコンになっていない!」と、物議をかもした。本校の3名も、授業では扱わない高度な数学知識を要するプログラムで苦勞してただけに「野鳥の会方式も冗談では考えたけど、プロコン本番でやるかあ~!?!」と不満一杯であった。一方で優勝チームは、様々な量のサイコロをテーブルにばら撒いて、統計的手法で野鳥の会方式を補正するという、実験を重ねた結果でもあった。

彼らの苦勞を考えると、サイコロの積み方を簡単にした画像処理方式限定のエキシビジョン大会をネット上で企画開催して、その大会で優勝しようぜ!とハッパをかけたい。

活躍する仲間

全国デザインコンペティションに参加して

スタート地点に立ったばかり

私は全国高専デザインコンペティションの数ある部門の中で、構造デザイン部門に参加しました。今年のデザコンのテーマは「デザインが起つ」。また、参加した部門のテーマは「デザイン・コストに配慮した橋～単純支持橋の軽量化コンテスト～」でした。

さて、本選当日は、自分達の今までで最高の出来の橋を携え、会場へと向かいました。会場に着いた私は、他の高専からエントリーされた作品を見ながら、このデザコンのレベルの高さを思い知りました。自分達よりもさらに、デザイン、軽量性を突き詰めた作品が多くあったからです。

特に、今コンテストで上位だったチームの作品は、自分達には無い工夫が多々あり、今回が初出場の私には、とても勉強になりました。また、他のチームの作品も、デザインについての発想や耐力に対する考え方などが素晴らしいと思いました。

3B 井 向 日 向

結果を残せなかった初のデザコン。しかし、多くを学びました。今回学んだことを活かし、来年もこのデザコンに挑戦しようと思います。「準備を終えて、まだスタート地点に立ったばかりだ。」と今の自分をそう思っています。ゴールを目指して、これから頑張りたいです。



第19回 全国高等専門学校 将棋大会に参加して



囲碁・将棋部 4C 竹 内 渉

福井からバスと飛行機を乗り継いで約7時間、全国高専将棋大会の会場がある北海道函館に着いた。着いてまず、交流対局に参加する。いつも通り強い相手が多かった。途中、松江高専と福井高専の部員が集まり、ちょっとした団体戦となった。あまり経験したことのない出来事だったので、新鮮味があり楽しかった。

その次の日から始まった大会の団体戦、結果は2回戦敗退で終わった。人数が足りず、結果すらなかった去年より良い結果である。そして個人戦、私たちの部からは1年生のみの参加であった。その内の1人が決勝トーナメント1回戦まで行くことができた

が、結果は残念ながら負けてしまった。しかし、4月の頃に比べて皆強くなっており、次のための良い経験になったと思う。

この調子なら、来年は今年よりも強くなっているのだどのような結果になるか楽しみである。とりあえず、松江高専に負けないように頑張る。松江高専の顧問は強敵だった。

最後に、今大会の参加に支援して下さった皆様、及び部会に来られて、ジュースをくださったり、指導して下さった学生生活係の加藤浩一さんに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

♪♪ 第44回福井県吹奏楽コンクールに参加して ♪♪

最後のコンクールを終えて

吹奏楽部 4C 坂川 緋梨

2012年7月22日曜日、私達吹奏楽部は第44回福井県吹奏楽コンクールに参加しました。

練習場所の制限、足りない時間、決して余裕があるとは言えない状況の中、休日を返上し努力をしました。私自身、部長という立場上、部員をまとめあげること必死で、何度も挫折しそうになりましたが、今まで一緒に練習を重ねてきた部員達、先生方の協力、励ましにより、そうならず前へ進み続けることができたのだと思います。参加するなら徹底的に上を目指すことを信念とし、今まで行っていなかった練習法を取り入れてみたり、元からのものをアレンジしたりもしました。

あっという間にやってきた本番当日は、緊張に加え焦燥さを感じていましたが、いざステージのライトを浴びると、それもどこかへと消え一人一人が奏でる音を練習の時以上に感じる事ができました。

本番を終え、自然にこぼれた笑顔に"ああ全部やり切ったのだな"という達成感を得ると同時に、引退することに対し少し寂しさも感じました。

結果は銀賞と金賞には届きませんでした。演奏には後悔はありません。新しい世代となった今、今後の活動に期待するばかりです。



第36回全国高等学校総合文化祭(囲碁部門)に参加して

全国へLet's go!

囲碁・将棋部 F1 三村 優太

僕は小学生の頃から囲碁をしています。囲碁は世代問わず、誰でも楽しめるゲームです。高校生になっても、全国大会(高文祭)に出場したいと思っていました。

相手が高校生ともなると、手強いですが、でも、予選で勝利し、なんとか高文祭への切符を手に入れました。

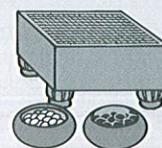
高文祭の会場は富山県でした。旅館に泊まり、美味しい海の幸もいただきました。

さすが、全国ともなると、レベルの高さに驚きました。結果は3勝3敗でした。上位に入ることができず、悔しかったです。でも、試合をしたことにより、

自分でも知らない打ち方を発見しました。また、県外の高校生に友達ことができました。とても楽しい大会でした。

これから、近畿の高文祭(和歌山大会)と北信越(長野県)で福井代表として出場します。自分の力を信じて、挑んでいきたいです。

最後に、今大会の参加に支援して下さった皆様、及び指導して下さった学生生活係の加藤浩一さんに心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。



活躍する仲間

第11回平成24年度全国高等学校合気道記念大会に参加して

Do 合気道

合気道部 3E 松井 勇 樹

8月3日、奈良県の奈良市立中央第二体育館で行われた第11回全国高等学校合気道演武大会に参加した。それは、全国の高専を含めた高校の合気道部が集まり、日々の練習成果や演武の見せ合いや、他校との合同練習を行うものであった。

他校の演武を見る機会は少ないため、各校の演武の違いに「面白い」と感じる自分がいた。勿論、それぞれ師範からの教わり方や練習方法により、技の一つ一つや演武の内容が異なるが、それぞれに完成された演武であり、合気道の世界、奥深さを知ることができた。新鮮な経験であり、合気道の「面白さ」を十分に実感した。

さらにその後の合同練習では、今まで感じたことなかった「楽しさ」も感じた。それは「面白い」と感じたことを他校の生徒と組み、合同練習することにより引き起こされたものと考えられる。

この機会を通して、合気道としての経験だけでなく、学校では得られない経験を得られた。このとき、合気道と出会い、合気道を続けて本当に良かったと思った。

これからは合気道でなくとも、自分の知らない世界を知る機会には積極的に参加し、自分を磨いていきたい。



平成24年度アジアユース人材育成プログラムAYDPO2012に参加して

平成24年度アジアユース人材育成プログラムに参加して 3B 森 淳之介

この夏、私はAYDPO（アジアユース人材育成プログラム）に参加しました。これは、アジア13か国の青年達が沖縄に20日間の滞在をして、水環境を始めとする様々な環境問題について知識を深めるというプログラムです。私がこれに参加したのは、専門教科の授業で水や環境について学ぶうちに、もっと世界の現状を知りたいと思ったこと、それから自分の英語を活かした英語として使ってみたいという気持ちからでした。

沖縄では、アジア各国の青年達と日常を共にし、水環境の授業では毎日のように議論を交わしました。初めは言葉の壁から、なかなか相手と意思疎通が出来ず大変でしたが、積極的に会話をするうちにお互いのことが少しずつ分かり、会話が楽しくなっていました。また、ハーリー体験、空手・エイサー

体験、伊江島での民泊などのプログラムを通して、沖縄の文化を肌で感じる事が出来ただけでなく、仲間との団結力がより強くなり、海を越えてたくさんの親友が出来ました。最後に、これからも語学力の向上に日々努力し、またこのようなプログラムがあれば積極的に参加していきたいと思います。



日独学生リーダー交流に参加して

日独学生青年リーダー交流事業

5B 永井 信明

日独学生青年リーダー交流事業はリーダーとして活動する学生が、ドイツで文化体験、意見交換、体験活動等を行うことにより、青年リーダーとしての資質を高めるとともに、日独の相互理解と交流の発展を図ります。

私は以前から環境保全活動に関心があり、自然学習塾「エコラボ」で活動しており、ドイツの優れた環境システムを実際に見てみたいと考え、本事業に応募しました。

実際に事業に参加すると、ドイツの環境保全活動をその目で見ることで以上の貴重な体験をすることとなったのが日独両方の参加者の話し合いでした。彼らは自分の考えをどんどん発信し、受信していました。私もそれを見習い会話すると、彼ら自身がたくさん努力し、大きな喜びを得てリーダーをしている

ことがわかりました。リーダーは誰にでもなることができ、よきリーダーになるためにはリーダー自身が楽しみを見出して行動をとり続けることが大切だとわかりました。

日本に帰国した後も本事業で得たリーダーシップを発揮したいと思います。



スピーチコンテストに参加して

やってよかった!!!

5C 西山 悟史

11月17日に石川高専で開催されたスピーチコンテストに参加してきました。出場したのは私と3Cの浦田君で、共に初めてではなかったので大会に向けての練習のノウハウは掴んでいました。大会に向けて毎日のように2人で練習し、こうしたら?とか、ここの発音はこれでいい?とお互いアドバイスし合って練習を重ねました。学校内で顔を見かけた時にも大会の話をしてモチベーションを上げて、大会前には先生の熱い指導のおかげもあり2人ともいいコンディションに仕上がっていました。

大会当日、移動の電車内でブツブツ原稿の最終確認をして、ここでもアドバイスし合って本番を迎えました。私は浦田君の1つ前の発表でした。緊張のあまり頭が真っ白になってしまいましたが何とかやり切り、一方の浦田君は私の発表中に固まっていた表情が一変、堂々とスピーチをこなしていました。

入賞は逃したものの、個人的に観客の方から、パッ

ションが伝わってきた、あなたの発表が私のベストよとコメントをいただけてやってよかった、伝えられてよかったと感じました。なかなか日常の中で英語を使う機会がない中、この経験は収穫が多く英語を身近に感じることでできる貴重なもので、これから活かせる実りのある大会でした。

Now, why don't you give it a try?



活躍する仲間

第48回高専祭

福井高専らしい高専祭って何？

学生主事補 岡本拓夫

今年度も高専祭が10月19日～10月21日、本校でいつもの様に行われ……という文頭にならない高専祭であったと思っている。学生達のバイタリティーとオリジナリティーで、種々の試みがなされたからである。'11年3.11では、地震動、津波、原子力に関連する被災がクローズアップされる様になった。特に福島県は、福井県と同じプラントを抱えている状況で被災に至った。福井県にある高専として、福島高専や仙台大専の情報は、重要なものとなる。さらに、福井高専はその立地の特性より一次避難所の指定を受けている。

学生達は、防災というキーワードを掲げて、近隣の住人の方と被災について、体験の共有の重要性を認識した様である。被災体験や福島高専・仙台大専のパネル展も、思った以上にみなさんの理解が得られた様だ。

高専祭は全般に渡り、天候に恵まれた。ステージ関連、露店関連とも多くの方々の訪問が得られた。裏方としての電源、駐車、警備の部門もスムーズに運営されていた。

実行委員の思い、他学生の思いが十分に達成された高専祭になったと考えられる。これらの経験がこれからの学業、卒業後の人生に活かされることを期待して筆を置く事にする。



第48回高専祭を終えて

高専祭実行委員長 4E 前田 剛

今年の実行委員会は、「Now～今だからできること～」をテーマに掲げ、2月に始動した。全64名という大きな規模の実行委員会となり、最初はまとまりもなかったが、高専祭が近づくにつれて皆で高専祭を創り上げたいという思いから1つにまとまっていた。

僕の中で、4年生として高専祭に携わることは非常に特別な事だった。それはメインの学年であり責任が重いこともあるが、何よりは高専祭に運営側として携われる最期の年である為だった。これまで、2年生で初めて企画として実行委員会に参加し、先輩方の背中を見て様々な事を学びながら仕事をしてきたが、今年は自分達の判断で実行委員会を動かしていかなければならない。そのプレッシャーは相当たるものだった。

しかし、今年実行委員として参加してくれた仲間を支えられ、「高専祭」という非常に大きなイベントを創り上げることが出来た。それは、この8カ月間という短い間に沢山の問題が起こったが、それを共に乗り越えてくれた実行委員のみんなのお陰だと思う。本当にありがとう。

「高専祭」を通し、多くの人の動かし方、仲間の大切さを改めて強く学んだ。そして、今年集まった実行委員だからこそできる高専祭、今近くにいる仲間とだからこそ過ごせる「Now」を思いっきり楽しむ事が出来た。

最後に、お世話になりました学生主事団の先生方、学生課の方々、関連する先生方に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

弁論大会

弁論大会を終えて

文化長 3B 寺川礼菜

10月18日に弁論大会が行われました。各クラス、文化委員を中心に夏休み前から活動してきました。テーマ募集をしたときに、沢山良いものが集まりました。ありがとうございます。その後、テーマや弁士が決まり忙しく大変でしたが、沢山の人のおかげで順調に準備を進めていくことができました。

前日準備では、学生会の方々や、文化委員のみなさんがシートを敷いたり、椅子を並べたりしてくれたので、すぐに準備が終わりました。そのおかげで前日、準備やリハーサルの時間が多くとれ、本番に向けての対応がしっかりとできました。

そして迎えた弁論大会当日。ほとんど緊張はせず、

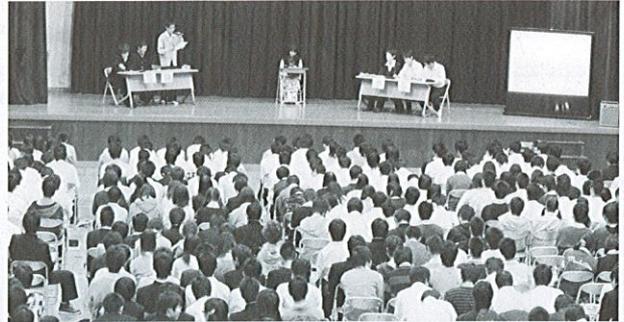
活躍する仲間

それよりもディベートが楽しみで仕方ありませんでした。今年は、学生同士での試合では聴衆を納得させるもの、面白いものが多く、聴いていてすごく楽しかったです。エキシビジョンマッチは、今年も素晴らしいパフォーマンスで、会場が盛り上がり私たちを十二分に楽しませてくれました。

成功するか不安な気持ちもありましたが、沢山の人の力のおかげで、この大会を無事成功させることができました。

最後になりましたが、弁論大会を運営するにあたって、協力して下さった先生方、学生のみなさん、

私を支えて下さった先輩や後輩、友達に感謝します。本当にありがとうございました。



高専祭 被災体験について

高専祭「被災体験」

4E 平 大 生

東日本大震災から約1年半がたった今、今年度の高専祭のテーマでも「Now」が掲げられているように、震災から1年半の歳月を経た今だからこそ自分たちにできることがあるのではないかという思いで立案された「被災体験」。高専祭2日目の夜から3日目の朝にかけて、青武台団地の方々25名と高専の学生リーダー含め一般学生、福井県防災士会、教員の方々を含めた合計55名の参加者で本館を舞台に被災体験は行われました。まずは当日寝泊りする教室に各4～8人に別れてもらい、段ボールハウスを作成しました。床に敷くだけの簡単なダンボールハウスもあれば、壁も作りプライバシーを保てるようなハウスを作った人までそれぞれ個性のある家を作っていました。そのあと防災ゲームを5Bの卒研生の方の指導で行いました。皆楽しみながら防災の知識を得て非常に和やかで意義のあるゲームとなりました。就寝の際にダンボールハウスに戻り、寝転がって寝たのですが、意外と暖かく寝心地の良いものでした。翌朝、食堂で温かいおにぎりとお味噌汁と非常食の炊き出しがありました。防災の知恵と被災した時の厳しさを感じることができ、有意義な企画になったと思います。



クリーン大作戦

クリーン大作戦を終えて

厚生長 3M 荒川 健太

今年も、クリーン大作戦を無事に成功させることができました。今までの先輩たちがやったように、うまくできるか不安でしたが、なんとか成功させることができたのでよかったです。当日、始まる直前に、ちょっとしたハプニングが起きたりして、僕自身かなり混乱していましたが、先輩たちのアドバイスのおかげで始めることもでき、本当に助かりました。天気も午前中曇り空で今にも雨が降り出しそうでしたが、皆が高専に戻ってくるまでは大丈夫だったのでよかったです。意外と街にはゴミがたくさん落ちていたようで、各ルートでゴミ袋をいっぱいにして戻ってき、クリーン大作戦をやったよかったですと思います。ゴミ拾いをして街もきれいになり、参加してくれた人の心もきれいになった事が、成功した証だなと僕は思いました。

このような行事をこれからも毎年行って、街も心もきれいに美しくなっていけたら良いなと思います。最後に、サポートして下さった先生方や先輩、皆さん本当にありがとうございました。



活躍する仲間

活躍する



キャンパスウォーク No.1



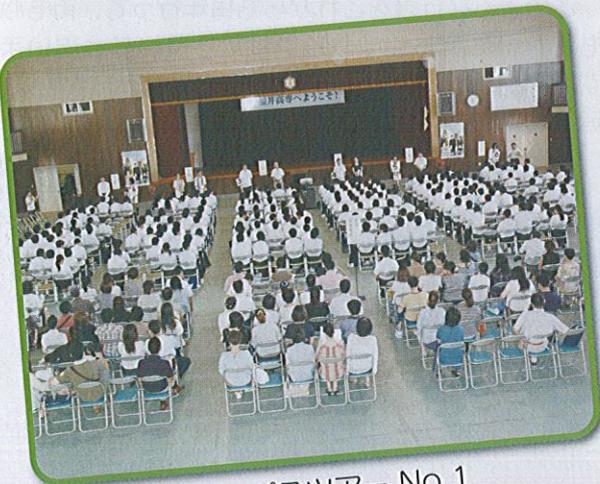
キャンパスウォーク No.2



キャンパスウォーク No.3



キャンパスウォーク No.4



キャンパスツアー No.1



キャンパスツアー No.2

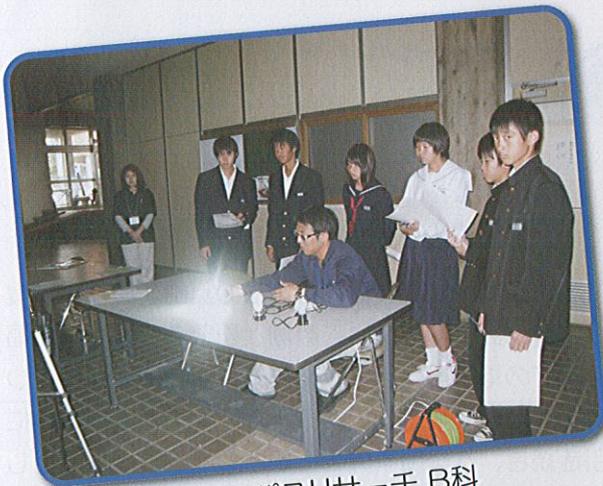
仲間たち



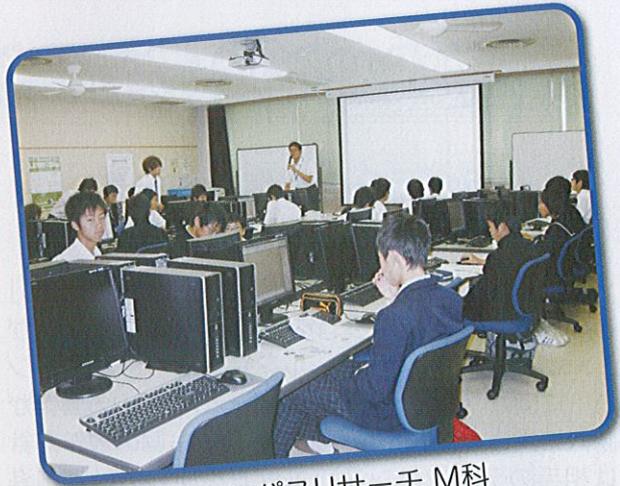
キャンパスリサーチ C科



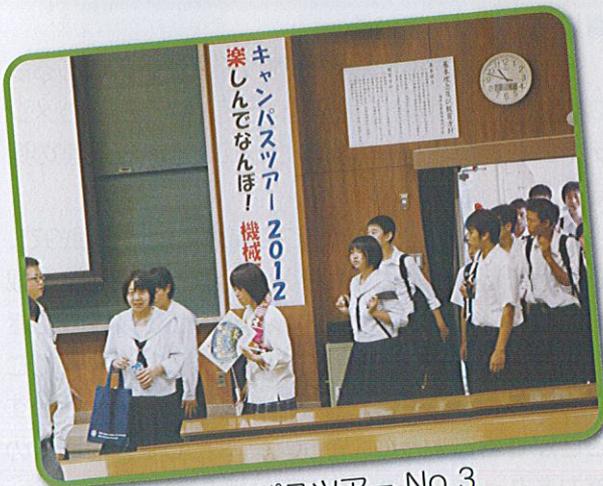
キャンパスリサーチ E科



キャンパスリサーチ B科



キャンパスリサーチ M科



キャンパスツアー No.3



キャンパスリサーチ Ei科

活躍する仲間

平成24年度教育後援会奨励研究一覧

学科 学年	申請者	研究題目	指導教員名	交付金額(円)
4M	青柳 研汰	ロボット「Crab Pet」の制作	安丸 尚樹	150,000
4E1	山口 純一	ロボット「れっばちびばん」の開発	千徳 英介	150,000
5B	中車 恭明	全国高専デザインコンペティション2012 in 小山 (元気にさせる地域特産「おもちゃ」)	江本 晃美	100,000
4B	田邊 祐真	ヒノキ材を用いた「単純支持橋」の模型の作製	吉田 雅穂	100,000
5E1	多田 一貴	早期プログラミング教育に向けた新しい 入力インターフェースの考案	蘆田 昇	84,000
4E1	山腰 貴大	子供とお年寄りとの交流のキッカケを提供する サービス開発	蘆田 昇	66,000
4E	山根 克明	迷路探索ロボットの製作	米田 知晃	57,000
3E1	野村 信吾	グループでのものづくりを支援するシステムの構築	西 仁司	74,000
3C	松村 岳	福井県及びその周辺における地殻活動の研究	岡本 拓夫	45,000
4E	竹内 陸	ソーラーカー4号機の高機能化	川本 昂	74,000
			計	900,000

平成23年度教育後援会奨励研究概要報告

パラポラQの製作について

5M 長谷部 崇 仁

昨年のNHKロボコンのテーマは「ロボ・ボウル」というもので、二足歩行のオフenseロボットがチームメンバーからボールを受け取り、別のメンバーに向かってボールをパスするので、人の動作が勝敗に大きく関わるルールである。今回の製作方針は相手のディフェンスロボットを押しつけて前進し、パスをする手段を取ることにした。その方がロボットの力強さをアピールすることができると考えたからである。

そのため、射出機構をシンプルにして足回りを重くすることで、重心を低くしたロボットにて試合に臨んだが、自分の操作ミスにより結局満足に動かすことができないまま試合を終えてしまい、全国大会進出の記録も断ってしまった。ご指導してくださった方たちに、大変申し訳ないと思う。

今回のロボコンではリーダーとしての立ち回り方、ロボット製作におけるプロジェクトの進め方を学び、様々な経験をすることができた。そしてロボコン製作に必要な資金等様々なご支援をいただき、誠にありがとうございました。

地震と減災

地球物理学研究会 3C 松村 岳

私たち地球物理学研究会はこの奨励研究で、地震活動や地盤特性について観測と研究を行い、特に福井県での地震活動と地球電磁気現象との関連性について統計的に調べている。また、本年度も昨年度に引き続き、本奨励研究の一環として減災を目的とした、地震発生時に地震の情報を流す防災ラジオの作製にも取り組んでいる。

また、本年度も昨年度と同じく、池田町にある今立郡池田町観測室(TIJ)へ行き、観測装置のメンテナンスと観測データのダウンロード、観測室の保守等を行った。

また、本奨励研究についての見識を深める目的で、京都府にある京都大学の宇治キャンパスに行き、観測に用いる装置やその解析手法などを見学してきた。今回の宇治キャンパスの見学を通して学んだことや感じたことを、これからの本奨励研究に活かすことができるように、意識を新たにしてより一層の努力をもって今後の研究に取り組もうと思っている。

ロボットを作るまで

ロボット部 4E 山口純一

今年で私はロボコンに参加して3年目になるのですが、今回はロボットに必要な部品の買い出しを主に行いました。機械や回路、プログラムそれぞれネットで注文したり、ホームセンターや電気専門店へ買いに行ったりしました。

今回実際に買い出しに行ってみて分かったのが、数多有る商品からロボットに活用できる物がないのかの見極めが必要で有るということです。作りたいものに対して既存の商品をどのように加工して理想の物を実現していくのか。製作を繰り返し、何度も作り直して部品を買い足していきます。そうすることで段々とロボットの形が出来ていく所は、ロボットを作っていく上でとても充実感のある瞬間です。

私はプログラム担当として参加してきて、ロボットの機械部分、回路部分が出来てからの最終作業を行ってきました。思い通りに動かない時は凄く焦るのですが、動いた時の達成感は忘れられません。特に今回は部品の買い出しから行ってきたのでより達成感を得る事が出来ました。

全日本学生室内飛行ロボットコンテスト初参加、入賞!

航空研究会一同 3E 井上俊之他

航空研究会は研究奨励金のおかげで、インドア飛行機を設計・制作し、目的であった第7回全日本学生室内飛行ロボットコンテストに初参加してきました。飛行ロボットは、災害時の緊急空中撮影や、各種環境自然観測への活用が期待されています。航空機開発に向けた人材育成とともに、飛行ロボットの実用化に貢献するために本大会が発足し、毎回参加チームが増加し、全国規模で広がっています。

第7回目となる今回の競技ルールは、滑走路から飛行を開始し、決められた領域のなかで用意されている課題をこなし、制限時間内に帰還するというものでした。課題はエリア内にある三つの円のなかで、それぞれ一つずつお手玉を落とします。この課題が終わり次第、次の課題である宙返り、手放し飛行、ゲート通過を挑戦することが出来ます。得点はこれらの課題による得点と接地等による減点から計算します。

この競技に対し、本研究会は、飛行機タイプの航空機を設計・制作し、「shooter - acro」という名前をつけて出場しました。この機体の特徴は運動性が富んでおり、操縦者の腕次第で正確に操作することが可能です。またモーターにパワーが有り、機体が軽いのでお手玉三つを搭載しても飛行できるだけでなく、そのまま頭を上にして垂直に静止させることもできます。

この性能を十分発揮したため、初出場にもかかわらず6位に入賞することが出来ました。着陸がエリアを5mmほど出たため、優勝を逃してしまいましたが、飛行時には、見ている人たちから歓声や拍手も頂け、一番目立ったチームとなりました。また、得るものも多く、大会を通して多くのことを学びました。

今後も、航空研究会の活動を積極的に行い、来年の学生室内飛行ロボットコンテストの優勝を目指して頑張りたいと思います。

Arduinoを用いた放射線検知ロボットの製作

4E 杉本翔里

今回僕たちは昨年3月に発生した「福島第一原子力発電所事故」の影響を受け、身近に放射線が存在していることをみんなに知ってもらうことを目的とした「Arduinoを用いた放射線検知ロボットの製作」の研究を行うこととしました。小さい子供でも興味をもつようにクワガタ型のロボットの上に放射線検出回路を搭載し、放射線を検知するとロボットが動作するものです。放射線検出器には通常良く用いられるGM管ではなくSiフォトダイオードを用いたため、1分間に0~2回程度のカウントしかなく、普通場所ではたまにしか動作しません。Siフォトダイオードからの信号を増幅する回路を製作したとき、ノイズが大きく放射線からの信号がノイズに埋もれてしまうなど様々な問題が生まれました。

授業で行う実験とは違い、進めていくたびに問題点が生じ、なかなかうまく進まず改めて電気や放射線など目に見えないものを相手にする難しさを痛感しました。

今回の奨励研究での経験をこれから活かし、ものづくりに取り組みたいと思っています。

活躍する仲間

コミュニケーション・サポートツールの開発

4E1 山 腰 貴 大

私は去年4人のチームを組んで、旅人と地元の人をつなぎ、旅をもっと楽しめるサービスを開発しました。このサービスは、自分の町に関するクイズやおすすめの場所を投稿し、その町に来た旅人がゲーム感覚でクイズを解いたり、ある場所に向かうことで、観光をもっと楽しめるだけでなく、町に関する知識を知れる、また教えられるというものです。

このサービスは、クイズや場所を投稿するためのWebサイト、それらの情報を取得し、表示するAndroidアプリ、アプリと連携して現在のゲームの進行状況や旅人の感情などを胸部の液晶スクリーンに表示する服型の独自デバイスで構成されます。研究奨励金により、Arduino基板やBluetoothモジュールを用いて独自デバイスを作成し、液晶スクリーンやAndroid端末などを揃えて開発環境を整えました。

このシステムの開発は平成23年3月ごろから始め、最終的な開発の目標としてその年の12月に行われた全国高専プロコンの課題部門への参加、上位入賞を考えました。紆余曲折しながらも予選を通過して本選までに何とか形にすることが出来ました。プレゼンやサービスのデモ実演で高評価を頂き、上位入賞する手ごたえはあったのですが、残念ながら敢闘賞に終わってしまいました。ただ、今回の開発を通じてチームでのソフトウェア開発に関するさまざまなことが分かったので、いい経験になったと思いました。

ひらく

1E5 紆 田 麻 未

昨年11月、北海道釧路市にて全国デザインコンペティションが開催された。デザコンのメインテーマは“ひらく”であり、4つの部門の内、ものづくり部門に出場した。この部門では、私達の最も身近な材料である紙を主な素材とし、楽器を制作するというものであった。

私達は、福井県の特産品である越前和紙を使用した楽器「和紙衛門」を制作した。本選では制作した楽器を使用し、課題曲である聖者の行進を演奏することが条件となっていた。しかし、実際にドレミファソの音階をつけることは非常に難しいと思っていたが、試行錯誤を繰り返し、本選では音量は小さかったものの、課題曲を演奏することができた。結果は惜しくも賞を逃したが、ひとつの作品をつくることの大変さを改めて実感した。また、今回の作品を通して、ものづくりの新たな可能性を“ひらく”ことができたのではないかと感じた。これからもデザコン出場に向けて挑戦し、新しい発想によって様々なものをつくっていききたい。

福井高専デザコンチーム強豪化計画1年目

豊橋技術科学大学
建築・都市システム学課程3年 辻 岡 晃

昨年のデザインコンペティションin北海道で僕たちは構造デザイン部門に出場しました。テーマは片持ち構造の強度コンテストでした。はじめは、「北海道に行きたい」という単純な考えから参加を決めました。やるからには4年前に経験したあの感動をもう一度経験すべく、173kgを乗せることを目標とし、仲間と共にできる限り上を目指しました。

しかし、いざ本番の会場に行ってみると僕らの想像を遥かに上回るデザイン性、強度を持つ作品がたくさんあり、載荷試験する前から心が折れそうになりました。そして、試験をしてみると案の定惨敗でした。でも、悔いはありません、それはたくさんの素晴らしい思い出ができ、さらに技術を継承して今後の福井高専デザコンチームの強豪化を図るというもう一つの目的が達成できたと感じているからです。僕たちは卒業しましたが、今後、デザコン経験者を中心に福井高専が強豪、そして、全国1位の常連となることを期待します。

太陽電池充電式二重層キャパシタのソーラーカー・電動バイクへの搭載

5E 澤 翔 吾

本奨励研究では、電気二重層キャパシタを小中学生が運転できるソーラーカーの方向指示器やLEDライトの電源、ミニ電動バイクに搭載するための基礎的研究を行った。電気二重層キャパシタとは、個体電極と電解質溶液が接触する界面において、極めて短い距離を隔てて正・負の電荷が対向した状態をいう。一对の個体電極を電解質の溶液に浸漬し直流電圧を印加すると、+側に分極された電極には-イオンが、-側に分極された電極には+イオンが静電気力により引き付けられ、それぞれの電極の界面に電気二重層が形成される。

実験結果より充電する際に満充電電圧に近づくにつれて、充電電流は低下する傾向にあることが分かった。今回は6分程度で満充電になった。これは太陽電池の出力を増やせば、充電時間が短縮されることを意味する。本研究より電気二重層キャパシタ蓄電システムが定電流源である太陽電池で高速充電できることが確認できた。太陽電池出力電圧が28Vのとき充電電圧が24Vになりモーターが定格運転する。また、モーターの突入電流が十分に供給できることが確かめられ、電動ミニバイクに搭載でき、実際に走行できるようになった。

進路決定について

青い鳥を見つけるために

新入生の志望動機に関するアンケート結果では、最近では就職が良いからが最も多くなっている。これは就職に関し、近年大学はかなり厳しく社会問題になっているのと対照的に、高専は不況下でも安定して好調なことが知られているためと考えられる。実際のところ大学と比較して求人倍率・内定率が高く、内々定時期もかなり早くなっている。超円高、欧州経済危機、日中間の領土問題等、厳しい経済状況が懸念される中、団塊の世代の退職者増に対応し、企業が技術力の継承を行うために、実践的な技術者教育を受けた高専生が期待されているためと考えられる。

しかしこれは大学と比較した相対的なもので、過去の高専の就職状況と比較するとかなり厳しくなっていると言わざるを得ない。一昔前は高専卒というだけで簡単な面接のみで採用になったが、最近では試験や作文が課され、面接もグループ面接や役員面接と複数回行い、優秀な人材であれば採用という企業が増えてきている。また、成績が優秀でも面接で自己PRや自分の考えを主張できない学生は不採用になる事例も増えており、コミュニケーション能力の重要性が増してきている。

一方、もう一つの進路の進学であるが、数年前まではクラスの約半数近くが進学していたが、最近進学者の割合が減少している。これは進学が難しく

進路指導委員会委員長 安丸尚樹

なったためではなく、経済的な事情から就職に変える学生が増えているためと考えられる。本来、技術の高度化・複合化に対応できる技術者になるためには、さらに専攻科進学や大学編入学により幅広い知識を身につける必要があり、安易に就職に流されないようにすべきである。

進路指導委員会では、相対的に就職の方が厳しさを増していることから、新たに就職に力点を置いた活動を開始している。まず、他高専で実施例が少ない合同企業説明会を2年前より開催し、今年度は12月に90社の企業が参加し、学外の会場で実施する。また、高専初の福井高専専用「求人票・掲示板閲覧システム」をWeb上に構築し、パソコンや携帯から就職情報を入力できるようにし、就職活動の利便性を向上した。さらに、4年生と専攻科生に対し、リクルート系企業と連携し、就職対策講座を系統的に年3回開催することにした。

最後に、自分の望む進路（青い鳥）を見つけ、鳥かごに入れるために、学生のみなさんは、以下の内容を低学年から実行して下さい。①基礎科目にしっかり取り組み、頭の足腰を鍛える。②エントリーシートに必要な、自己PRの種をまいておく。③面接に必要なコミュニケーション能力を高める。特に、採用試験にTOEICの点数が関係する例が増えており、英語に真剣に取り組む。

平成24年度進路内定状況

平成24年12月10日現在

学科	区分	卒業・修了 予定者数	進 学 希望者数	内 定 者 数			未定 者数	就 職 希望者数	内 定 者 数		未定 者数	その他
				大学(院)	専攻科	専門学校			県 内	県 外		
本 科	機 械 工 学 科	42 (1)	18 (1)	11	6(1)	0	1	23	7	16	0	1
	電 気 電 子 工 学 科	37 (2)	14 (1)	11(1)	3	0	0	23 (1)	4 (1)	19	0	0
	電 子 情 報 工 学 科	43 (5)	17 (1)	11(1)	5	0	1	25 (4)	10 (3)	15 (1)	0	1
	物 質 工 学 科	38(12)	10 (1)	8(1)	1	0	1	26(11)	10 (5)	16(6)	0	2
	環 境 都 市 工 学 科	35(10)	13 (5)	10(4)	2(1)	0	1	22 (5)	8 (2)	11 (1)	3(2)	0
	小 計	195(30)	72 (9)	51(7)	17(2)	0	4	119(21)	39(11)	77 (8)	3(2)	4
専 攻 科	生 産 シ ス テ ム 工 学 専 攻	17	5	5		0	0	10	6	4	0	2
	環 境 シ ス テ ム 工 学 専 攻	10 (2)	4 (1)	3(1)		0	1	5 (1)	1	3 (1)	1	1
	小 計	27 (2)	9 (1)	8(1)		0	1	15 (1)	7	7 (1)	1	3
合 計		222(32)	81(10)	59(8)	17(2)	0	5	134(22)	46(11)	84 (9)	4 (2)	7

表中の()は女子数で内数

学生の将来と進路

大学編入学試験体験記

編入ヒストリー

5B 芹川 由布子

3月下旬、進路変更を決意し大学を目指す。4月、志望校決定（この時まで推薦志望）。5月下旬、惜しくも推薦入学却下。それから1カ月間猛勉強に励む。6月下旬、編入試験受験。7月6日に見事合格という流れでした。ここからその詳細を語っていきましょう。

将来の目標が定まった私は、大学を出て学位を取ろうと決意しました。しかしそのときすでに4月、学力に自信の無かった私は推薦で入学しようと考えました。出願も無事済ませ、それからはひたすら面接練習に励んでいました。しかし5月下旬に状況は一変し、学力選抜で受験することになりました。受験までの時間も残り少なく、私は焦りを感じ、とにかく過去問をたくさん解くことにしました。しかし、分からない問題が殆どなうえに、いくら勉強しても範囲が広すぎて出来るようになったという実感もわかず精神的に辛い時期が過ぎました。

焦りや不安で押しつぶされそうな時、そのプレッシャーを和らげてくれたのは先生や友達の励ましでした。先生は、「この受験だけがすべてじゃないよ」などの言葉をかけてくださり、推薦の試験を終えた友達は、休みの日も毎日勉強を教えてくださいました。

試験が近くなってくると、自分のしてきたことに自信が持てず、周りの支えさえもプレッシャーに感じてしまうこともありましたが、支えがあったからこそ、1カ月間挫折することなく勉強を続けることができ、合格という結果になりました。そして色々葛藤があった中で頑張りぬけた自分に少し自信が持てるようになりました。もしだめだったとしてもこの編入学試験を通して得たものは多く、私の人生の中でプラスになったでしょう。

就職試験体験記

僕の就職面接

5M 三上 紘平

就職面接とは、今までで体験したことのない体験である。当たり前と言ってしまうとそこのだが、一つ一つの細かいことまでが未知の体験なのである。

試験会場である会社に入った瞬間から誰かに見られているような錯覚を感じた。ロビーで待っていたほんの数分すらも何時間にも感じた。会社の方が呼びに来られたときには、今から何をされるんだ？と恐ろしい気持ちになった。

適性試験や作文といった筆記試験が始まると、この内容で本当に大丈夫なのか、といった評価のことばかりが頭を駆けめぐっていた。ちょっとした休憩の時でも、気が休まる瞬間など一時もない。全く落ち着かないまま、いよいよ面接のときがくると、心臓が飛び出るんじゃないかというくらい緊張が最高潮に達した。

面接会場に入ると、面接官が6人もいた。ドラマに出てくるような取調べのような感じであった。しかし面接が始まると、話しているうちに自然と気持ちが落ち着いた。面接そのものも、自然と言葉ができて、面接というよりかは会話をしているような感覚で、思ったこと話すことができた。すべてを出し切った感じで、終わった後はなんとも清々しい気持ちになった。

結果、内定を頂くことができた。自分を出し切ること。就職面接では鉄則です!!

インターンシップ体験記(本科)

私のインターンシップ体験記

4E 田保貴大

私は将来新エネルギー開発や、既存のエネルギーの更なる改良などを手掛ける職業に就きたいと思い、昨今注目を浴びつつある「メタンハイドレート」という天然ガスを研究・開発している大阪ガス株式会社で研修をさせていただきました。全国から私と同じ高専生が集まり、大阪ガス本社、各事業所にて会社見学や実際の業務内容を7日間体験させていただきました。

今回のインターンシップでは、当然のことですが全く知らない他県の高専の方々とグループを組み、一緒に行動したり、ディスカッションを行ったりと、高いレベルでのコミュニケーション能力を求められることになりました。具体的には、自分の意見をしっかりと周りに伝えることができること、相手の意見を聞き、良いところを自らのものにするということです。自分の意見だけを言うのではなく、他人の意見を取り入れることにより自分のもつアイデアや考えをより良いものにしていくことが研究・開発において必要なことだと社員の方々も仰っておられました。

また、実際に働く現場を体験したことは、私の仕事に対する意識を大きく変えることに繋がりました。今まで私は仕事に対する意識が低く、将来の展望について深く考えたこともなかったのですが、仕事というものは会社の中だけでなく、他の会社やお客様方との密接な関わりによって成り立っているものだということを知ることができました。

今回の貴重な体験を活かして、これからの学校生活を益々充実したものにするとともに、将来のことを見据えて今から勉学や部活動に励んでいきたいと思えます。

ソフトウェア開発 in 横浜

4E1 武永恒一郎

私は、ソフトウェア開発の分野に興味を持っていたので、横浜にある㈱アットウェアのサービス創生事業部という部署で10日間実習をさせていただきました。

実習内容は、基本的な動作はするようになっていたWebサービス「atYomu」に手を加えていくというものでした。前半は、ユーザがなるべく使いやすいように画面レイアウトの修正を行いました。これには、今まで使ったことのないプログラミング言語での記述だったため、かなり苦労しましたが、なんとか完成させることができました。後半は、「atYomu」のAndroidクライアントへの実装を行いました。Android系は、以前から個人的に勉強していたので、少し躓きはしましたが、比較的余裕を持って作業を進めることができました。最終日には、社員の方達の前でプレゼンテーションを行い、資料の作り方や発表するときの注意点なども教えて頂き、とても参考になりました。

実習を通し、社員の方達と一緒に食事をする機会もあり、様々な話をしました。このような交流をすることで、自分のコミュニケーション能力を養うことができました。また、ソフトウェア開発の分野は、日進月歩でどんどん新しいものが出てきている面白い分野であること、しかし、それと同時に浮き沈みが激しい分野であることも知ることができました。面白い一面もあれば辛い一面もあるということを実感できるすごくいい経験になりました。今後の進路の参考になることばかりで、とても充実したインターンシップになりました。

学生の将来と進路

インターンシップ体験記(専攻科)

インターンシップ体験記

1PS 柴田 晃平

今回インターンシップでお世話になったのは、株式会社フジクラ佐倉事業所である。配属部署は自動車電装開発部で、主に自動車用ハーネスの設計、開発を行っている部署であった。当初は、研修でどのようなことをするのだろうか、などと不安でいっぱいだった。

今回、職種の全く異なる二つの研修を行った。一つは現場での作業体験として自動車のハーネス作製研修。もう一つは最先端の開発体験としてモデルベース開発研修である。1カ月ある研修期間のうち、1週間はハーネス作製、3週間はモデルベース開発を行った。

ハーネス作製研修は電線、コネクタ、端子を使用し、設計図通りにハーネスを作製するもので、地道で繊細な作業であった。現場で作業をしていたので現場社員の方々と話す機会が多く、作業は大変だったが有意義な研修を行うことが出来た。

モデルベース開発研修はMATLAB/Simulinkを使った研修であった。はじめにMATLABの使い方を学び、その後、実車のヘッドランプ解析からヘッドランプの動きを制御するモデルを作成した。本科で学んできたプログラムを活かすことが出来、また実車を解析する研修であったため、車に興味のある私にはとても勉強になる研修であった。

専攻科のインターンシップ期間は1カ月と長いですが、実際に研修を終えてみると短く感じた。期間が長いので社員の方と親しくなり、内容の濃い研修を行うことが出来た。また研修や社内で行った報告会などから学校では学べないことを多く学ぶことが出来た。株式会社フジクラのことを知る事ができ、将来この会社に就き仕事がしたいと思うような企業、インターンシップ体験であった。

専攻科生による校外発表会

校外発表を終えて

1PS 小田村 真志

2012年10月19日、まだ少し暖かい晴れた日に私は京都駅に降り立った。2年に1度、日本材料学会が主催する地盤改良シンポジウムと呼ばれる学会が開催される。私はスーツに身を包み、京都駅から一步を踏み出した。前回のシンポジウムは、福井のアオッサで行われており、毎回各大学の教授や、会社の役員などが発表を聞きに参加している。発表に参加する人数は年々増加しており、各セクションに分かれて発表を競い合っている。今年は、各セクション合計で全85人もの発表者がいた。その中で、今回私が戦うセクションは、発生土・汚泥と呼ばれるところで、最も激戦区であった。

受付を済ませ、奥へ進むと私の特別研究を受け持っていて先生が私を出迎えてくれた。先生は前回の地盤改良シンポジウムに引き続き今回も委員長を務めている。

一緒に出迎えてくれたもう一人の先生は、普段授業を受け持っていて先生で、分かり易い講義を行ってくださるありがたい先生である。緊張を隠せない私に「そんな緊張しなくても、普段通りやれば問題ないよ」と声をかけていただいた。その言葉でなんだか救われたような気持ちになり、本番はステージに立って堂々と発表することができた。

本番直前でいろいろと焦るよりは、しっかりと練習をし、本番に普段通りができた方がよい。今回のこの学会で、練習の大切さを実感することが出来た。これからの学校生活でも活かすことが私の新しい課題である。



中学生の皆さんへ

キャンパスツアー-2012及びキャンパスリサーチ2012の開催について

教務主事 上 島 晃 智

本校夏のオープンキャンパス「キャンパスツアー2012」及び秋のオープンキャンパス「キャンパスリサーチ2012」が、それぞれ8月4日（土）、10月6日（土）に行われました。

福井高専では、オープンキャンパスを春・夏・秋の年3回実施しています。春のオープンキャンパスでは学校の施設や部活動を見学して学校に興味を持ってもらい、夏では各学科で具体的にどのようなことを学ぶのかをデモ実験を通して知ってもらう。また、秋には志望学科の体験授業を受けてもらい、入学したときのイメージをふくらませてもらい、徐々に本校への進学意思を固めてもらおうという趣向です。

さて、オープンキャンパスの第2弾となる「キャンパスツアー2012」では、まだセミの鳴き声が響きわたる猛暑の中、中学の生徒、保護者、教員併せて726名の参加をいただきました。参加者は、本校の1年生に案内され、3時間ほどかけて校内を回り、各学科の趣向を凝らしたデモ実験を見学してゆきました。

また、高専生のホンネを聞く「交流コーナー」や、

保護者、教員対象の「進路相談コーナー」も設け、訪れた方々はそれぞれの立場でいろいろなことを質問されてゆきました。

次の第3弾となる「キャンパスリサーチ2012」は、秋の気配漂う中、中学の3年生161名が参加し、開催されました。参加した生徒たちは、事前に希望した2学科の授業を各50分で体験し、自分の進路と重ね合わせ目を輝かせていました。

また、これに併せて入試相談コーナーも開催され、保護者の方が熱心に質問をする姿が多く見られました。

このように、中学3年生の進路意識に応じてオープンキャンパスを催し、多くの中学生や保護者の方々とお会いしてきました。来春、一人でも多くの方々と、このキャンパスで再会できることを楽しみにしています。



中学校だより

われらの信条 誠実・英知・健康

鯖江市鯖江中学校

本校は、現在の西山公園のもととなった嚮陽溪の中（現在の進徳小学校の場所）に、昭和24年4月に誕生した。この由緒ある地で営まれた我が校の教育を、第七代鯖江藩主間部詮勝侯が嚮陽溪を拓かれた精神にちなんで、「嚮陽教育」としている。すなわち、「陽（ひ）に嚮（む）かって、明るく自ら進んで学んでいく姿」を意味するものである。昭和58年4月に現在の場所に校舎を移転したが、その精神はそのまま今日まで引き継がれている。創立以来63年、本校を巣立った同窓生は23,768名を数えている。

今年度は、生徒数781名、学級数28学級という県内でも有数の大規模校であるが、学校目標「主体的に学び、豊かな心でたくましく伸びようとする生徒の育成」のもと、われらの信条である「誠実・英知・健康」をめざして、生徒たちは学習や部活動に熱心に励んでいる。

部活動は、運動部・文化部とも大変盛んであり、男子駅伝チームは、県中学校駅伝競走大会で見事優

勝し、全国大会に出場することになっている。また、男子バレーボール部も県秋季新人大会で優勝した。一方で、文化部では吹奏楽部が県代表の常連となっており、アンサンブルコンテストでは2年連続で全国大会に出場している。

また、地域や保護者の方々の学校に対する理解も厚く、挨拶運動や校地の美化活動など、様々な面で協力をいただいている。このように温かい人々に恵まれた素晴らしい環境の中で、生徒たちは健やかにのびのびと学校生活を送っている。



学園通信

救急救命講習会・実技講習会

4B 田谷 修人

夏休み前に、各部活動の代表の人達と先生方が集まり救急救命講習会・実技講習会に参加しました。

まず、消防署の方々から熱中症に関する講習を受けました。この講習では、熱中症になる原因や熱中症になってしまった時の対応の仕方や、熱中症の予防について学ぶことができました。熱中症になる場所の多くが家などの室内であるということが印象に残りました。

次に、道端などで倒れている人がいた場合の対処法を実技形式で教わりました。周囲が安全であるかを確認して、意識確認や心肺蘇生法を行いました。

これらのことは、救急車やAEDが到着するまでの応急処置であり、いかに大切であるかということが分かりました。

次にAEDの操作を行いました。これは機械が全て音声で説明してくれるので、初めて見る人でも簡単に扱える機械だと思いました。

この講習会に参加したのは一部の学生と先生でしたが、もっと多くの方がこのような講習に参加して、より多くの方が人命救助に携われるといいなと思いました。

女子中学生の理工系分野への進路選択支援

企画室長 田中 嘉津彦

去る9月22日(土)、女子中学生の進路選択を支援することを目的に、「女子中学生と保護者のための公開講座・懇談会」を開催した。本企画も今年で4回目を迎え、オープンキャンパスと同様、県内の中学校では本校の恒例行事として認識されているようで、当日は中学1～3年生37名、その保護者21名の参加があった。この内、5名の中学生は昨年度も参加されていた。

参加者は5学科とサイエンスクラブをあわせた6コースから3コースを選択し、日常生活に関係深い各学科等の代表的なものづくりやデモ実験を本校女子学生指導の下で体験してもらい、理工系分野への興味・関心を抱く機会を提供した。

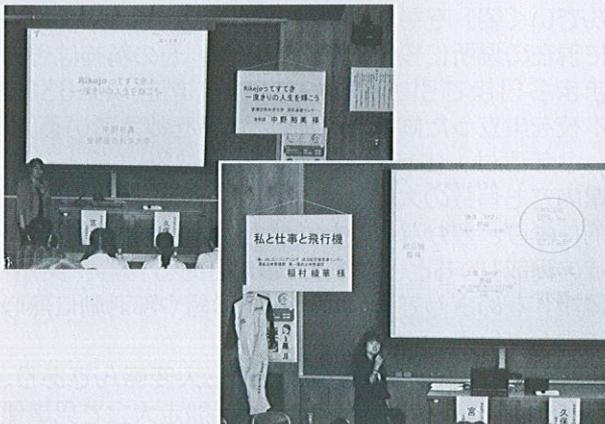
体験学習後は新しい試みとして、研究・技術の各分野で活躍中の本校OG2人(豊橋技術科学大学 中野裕美准教授及び(株)JALエンジニアリング 稲村綾華氏)による講演を行い、理工系の女性が社会へ参画していく素晴らしさと楽しさを披露してもらった。

講演後は前述したOGを交え、例年と同様に女子学生の進行による懇談会を実施した。懇談会は終始和やかな雰囲気が進み、女性ならではの質問・疑問に対して、女子学生たちは素直な姿勢で経験談を交

えながら回答していた。なお、希望者には女子寮も見学してもらった。

本企画終了後のアンケートによると、本校に対するイメージや教育制度・内容に対する認識を深める他、進路の選択肢として理工系分野も考える機会となったとの回答が目立った。今回の参加者の中から、一人でも多くの女子中学生が実際に理工系分野を選択し、技術者・研究者として将来活躍してもらえれば、本企画も大成功であろう。

本企画を開催するのに当っては、本校女子学生を始め教職員の皆様のご支援とご協力を頂いた。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。



平成24年度 『防災訓練』の実施

総務課

本校では、10月3日（水）に鯖江・丹生消防署協力のもと全校学生・教職員が参加し、緊急地震速報の後、地震の発生と地震に伴う火災が発生したとの想定で防災訓練を実施した。

避難場所での点呼確認の後、校長より訓辞があり、消防署からは、「常日頃から、地震や火災が発生した場合には、自分の命は自分で守るという気持ちを持ち、迅速で落ち着いた行動を心がけるように」との講評があった。

避難訓練の後、1年生全員が煙で一杯になった教室の中を通過することで煙の怖さを体験し、さらに「消火器訓練」「起震車による模擬体験」「はしご車によ

る避難体験」を行い、防災に対する意識の高揚を図った。



学寮防災訓練について

口はタオルやハンカチで覆って避難する

寮務主事 坪川 武弘

学生寮では、「火災等の災害時において、速やかに通報及び避難、消火ができるように防災訓練を行い防火意識の高揚を図る」目的で、8月6日（月）夜8時より、鯖江・丹生消防組合消防本部の協力のもと、全寮生の参加による防災訓練を実施しました。当日は、東寮2階補食談話室から火災が発生したとの想定で初期消火・通報訓練、避難訓練を行いました。計画避難場所への避難は整然と迅速に行うことが出来ました。

避難場所での点呼確認後、寮務主事団からの感想と、消防署本部からの講評がありました。講評の中で、訓練では、「騒ぐことも慌てることもなく、非常に冷静な避難でした」との意見と「避難の際には煙を吸い込まないようにハンカチやタオルで口を覆うことが大切です」という指摘がありました。

通報訓練、避難訓練の後、1年生（男女3名）と留学生（3年生2名）が消火器による消火訓練を行い、その後5年生全員が屋内消火栓による放水消火訓練を行いました。消火栓からの放水は今回初めての試みでした。実際に行ってみて、消火栓のそばにいる人と放水器のノズルを持つ人の2名1組で行うこと、ホースは完全にのばして使うこと、放水時の圧力は

1人でも制することができる程度であることなど、分かることがいくつかありました。

また、今回の訓練に合わせて、備蓄している非常食と水を寮生に配布し試食してもらいました。非常食はなかなかおいしいものでした。

避難訓練はそれが本当に必要となった場合どこまでその成果を発揮することができるのか悩ましいところです。しかし、防災意識の向上と何回かの訓練を経ることで対処できることが増えることも事実です。今回の訓練がこれから生きることを期待したいと思います。盛夏の暑い時期でしたので放水後はすこし涼を感じる事ができました。



オープンキャンパス等風景



キャンパスウォーク No.5



キャンパスウォーク No.6



キャンパスツアー No.4



キャンパスツアー No.5



キャンパスリサーチ B科



キャンパスリサーチ Ei科


2012
 高等制度創設50周年
 『進化する高専』
 (愛称) ココケン

高専は、高専制度創設50周年にあたり、「進化する高専」を目標し、科学技術創造立国を担う感性と創造性が豊かな実践の技術者の育成を通して、地域社会と国際社会の発展に貢献します。

題字 池田大祐校長、マーク 本校ロゴマーク
 平成24年12月17日発行 ☆福井工業高等専門学校
 ☆〒916-8507 鯖江市下司町 TEL 0778-62-1111